

ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる(2)¹⁾

——「人気俳優」と「社会社説担当」——

阿部 安成

「ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる(1)——「沖縄のらい者の父」青木恵哉」

Working Paper Series No.295、滋賀大学経済学部、2020年3月

「ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる(2.5)——『隔離の記憶』と『13(サーティーン)』」

Working Paper Series、滋賀大学経済学部、2020年5月予定

「ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる(3完)——「おひい様と呼ばれ」た井伊文子」

『彦根論叢』第424号、2020年7月予定

「高校生が被爆体験を描く——「ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる」番外」

Working Paper Series、滋賀大学経済学部、2020年予定

本稿見出し はじめにかえて / 「人気俳優」 / 「社会社説担当」 / いま / 余瀝 / 終 / おわりに
かえて

はじめにかえて COVID-19 (Coronavirus Disease 2019=新型コロナウイルス感染症)へのひとの対応が人びとをざわつかせている 2020年2月下旬に、今年初めて、国立ハンセン病資料館(東京都東村山市)を訪うた(23日)。同館に隣接する国立療養所多磨全生園の史跡といってよい柵の垣根が一部であれ取り除かれていたことに驚いた。自動車の通行量が多い道路に面してのびるそれが見通しを妨げているとの苦情が寄せられたゆえの処置だと聞いた。周囲がすっかり宅地化されたいまや、療養所のかつてのようすをあらわす造物の撤去も、止むを得なくなったということか。

23日、24日に予定されていた同館内での催しが中止されたことにもまたびっくりした。

¹⁾ 本稿は2020年度科学研究費助成事業基盤研究(B)(一般)「近現代日本における病者・療養者の生」(研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也)による成果のひとつである。

そこまでする必要があるかどうか——ただ、同館には国立療養所多磨全生園の在園者が来ることがあり（その両日に実際に同園からの来館者がいた）、後期高齢者が多い在園者への配慮として適切だったかもしれない。

「人気俳優」 東京から住地に帰って数日が経った2020年2月28日の朝、その日の『朝日新聞』朝刊「ひと」欄が目にとまった。見出しは、「全国のハンセン病療養所の「いま」を撮った俳優／石井正則さん（46）」——「人気俳優の傍ら、自転車や喫茶店巡りなど多彩な趣味をもつ。フィルムカメラへの愛は人一倍だ」との紹介がある「人気俳優」が、「「これは撮りに行くことになるんだろうな」。そう予感した〔させた、か？——引用者による。以下同〕のは、偶然目にしたハンセン病のドキュメンタリー番組だった」と紙面に記される。その「番組」にあらわれた映像は、「病気になった人を閉じ込めてきた瀬戸内海の島が舞台。海から引き揚げられた、岩に見えたものは患者に使われた解剖台だった」。さきの「予感」にいう「これ」とは、「解剖台」そのものを指すか、あるいは、「ドキュメンタリー番組」の「舞台」となった「瀬戸内海の島」か、それとも、「感嘆・驚嘆して発する語」（『広辞苑』第6版）である「これは」だったのか。500字あまりのわずかな字数で組む欄にあればこれも記そうとすると、勢い言葉が雑になるのだろう。「患者に使われた解剖台」との文辞にも、なんとハンセン病施設で生体解剖がおこなわれていたのかと、どきっとしてしまふ。

さらにもうひとつというと、記事にいう「ハンセン病のドキュメンタリー番組」がなにかがまるでわからないものの、そこでの映像が「海から引き揚げられた」解剖台であれば、それが「岩に見え」ようはずはないと（ずっと引いたところから撮った映像であればべつだが）、わたしはおもう。これは当時、国立療養所大島青松園（香川県高松市）を会場とした瀬戸内国際芸術祭2010の開催にむけて引き揚げられ展示されたのだから、ただの「岩に見えた」としたら、それはそれで惚^{ほうけ}と感じてしまう²⁾。

2) 解剖台が引き揚げられ展示された当時の「ドキュメンタリー番組」または情報バラエティ系番組は管見のかぎりでは、「島から発信するアート 瀬戸内国際芸術祭2020」（『ぐるっと関西 おひるまえ』NHK総合、2010年9月4日放送）、「島とアートを巡る冒険 瀬戸内国際芸術祭2010」（『日曜美術館』NHK教育、同年同月5日放送）、「ひびきあう島と芸術」（『しこく8』NHK総合、同年同月17日放送）、「その手をつないで ハンセン病の島から未来へ」（『NNNドキュメント'10』読売テレビ系、同年同月27日放送）があり、

この日の「ひと」欄は「文・高木智子」——同人には、『隔離の記憶—ハンセン病といのちと希望と』（彩流社、2015年）の著書がある（同書への書評を執筆予定）。

くだんの記事にもどると、「重い歴史をもつ土地の記憶を、いま、この瞬間の光とともに焼き付けておきたい——。8 1/2×10 1/2の大判カメラを相棒に、2016年に東京郊外の多磨全生園を訪ねた。社会と隔てた門の前に立つと、気配が違くと肌で感じた」——ここに引用した3つの文の主語は、「ひと」欄がとりあげた「人気俳優」でよいのだろう。そう、彼は、テレビ朝日系放送のドラマ「相棒」season15（2016年～2017年）の第3話（2016年10月26日）に「谷中敏夫」役で出演していたという³⁾。だから、「カメラを相棒に」か。その「相棒」とともに東京都東村山市にある国立療養所多磨全生園を訪い、「社会と隔てた門の前に立つと、気配が違くと肌で感じた」というときの「社会と隔てた」とは、なにが、なにを、「社会と隔てた」のだろうか。もう一言いうと、わたしも同園の正門をいくどもとおった。しかし、なにかしら「気配が違くと肌で感じた」ことは、これまでにただの一度もなかった。むしろそこに立って目がむくさきは、正門からいくらか入ったところにある木立のなかの建造物で、神社のちいさな社殿のようなそれがなにかと気にすることから、この療養所を知ることにつながるはずだとおもうのだが。「人気俳優」はその社殿にはまるで気づかなかったということか。

そうした観察をせずただ「気配が違くと肌で感じた」と記されてしまうことは、いわば対象を特異化するためのお手盛りだとおもう。わたしは同園の在住者から数年まえに、電化製品の修理にきた業者がここはなにの施設ですかと尋ねた、という話（その場では笑い話となった）を聞いたことがある。同園の周囲には道路1本を隔てて民家が建ちならび、もはや市街地化されたといつてよく、いまでは「地域のお子さんも入園が可能となりました！」との呼びかけがある「国立療養所多磨全生園あおば保育園」もある（同園ホームページ）。

それぞれに、大島をとりあげなかったり、大島をとりあげても解剖台にふれなかったり、近くに寄って解剖台を大写しにしたりしていた。映像のなかの解剖台は野ざらしではなく、解剖台のうえには屋根があり、そのしたに岩があるとは想像できようもない気がするのだが。もっとも岩を屋根で覆うアートがあってもよいとおもう。

³⁾ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』（2020年2月29日閲覧）。同サイトによるとこの「人気俳優」は「お笑いコンビ「アリ to キリギリス」でボケを担っていた。神奈川県横浜市保土ヶ谷区出身で神奈川県立商工高等学校を卒業し、現在はホリプロがマネジメントしている」とのこと。

ージ。2020年2月29日閲覧) 4)。

くりかえせばさきの言述には、なにやら、ことさらに、この療養所を特別な場所に仕立てあげようとする意図がうかがえてしまう、といっは穿った見方だろうか。「重い歴史をもつ土地の記憶」との形容もあった。そうだ、「重い歴史をもつ土地の記憶」というときの、「歴史」と「記憶」とは、なにが、どう、異なるのか、いや、違わないのか。

「人気俳優」は、2016年から2019年にかけて「東北から沖縄の宮古島まで療養所と呼ばれる13施設」を「回り終えた」らしく、「火葬場や納骨堂、解体中の刑務所といった隔離の象徴のみならず、出会った人々の穏やかな表情を白黒で撮った」。ここには、対照の表記がある——「老朽化し、建て替えが進む所もあり」、「景色が変わってしま」おうとしている「隔離の象徴」と、いまもなお、それらが残る施設に暮らす「人々の穏やかな表情」と、が照らしあわされている。対照の記述は、この「ひと」欄にもうひとつ登場する——「虐げられても、優しさをキープする、そんな強さを僕は学んだかもしれない」。不当にも虐げられてしまう弱い存在が、しかし、優しさを保つ強さをあらわす、というわけだ。ハンセン病をめぐる記述にしばしばみられる逆接の言述である 5)。

もとよりハンセン病施設は、一般の病院とも療養所とも異なりはする。それをわざわざ、よりいっその異様特異な場所に仕上げてみせ、そのなかに、それとの対比で「優し」い 在園者をまつりあげる。わたしは、これを不当な記述だと感じる。ただ、わたしには嫌な感じがあるこうした記述も、「人気俳優」の計らいなのではなく、これは「文」の作り手の所為なのかもしれず、では、「人気俳優」が療養所をどう撮ったかが気になる。そして、彼にとってカメラで対象を「撮」るとは、どういうことなのか、それも知りたい。もちろん、ただの「多彩な趣味」のひとつであっても、いっこうにかまいはしないのだが。

記事に、「国立ハンセン病資料館（東京）で写真展を準備している」との紹介がある。わ

4) いまからさかのぼってそう遠くはないといっはよいであろう過去に、「普段は入れないところに潜入し、／外からはうかがい知れないディープな裏側を探りだせ！／爆笑問題が繰り広げる、知の大活劇。／世界のフシギを笑いのうちに解明していく、／教養エンターテインメント番組「探検バクモン」が同園に「DEEP INSIDE」していた（「ハンセン病を知っていますか」『探検バクモン』NHK 総合、2015年6月10日放送）。同園内をまるで異界視するかのような観点はもちろんテレビジョン業界の外にもある。この番組の放送はときあたかも「人気俳優」が療養所めぐりをし始めた時期とおおよそ重なる。

5) 阿部安成『透過する隔離—療養所での生をめぐる批評の在処』滋賀大学経済学部研究叢書第48号（滋賀大学経済学部、2014年）を参照（滋賀大学附属図書館ホームページのり

たしは2020年2月下旬に同館へゆき、「石井正則写真展「13(サーティーン)～ハンセン病療養所の現在を撮る～」(同年2月29日～5月6日)が同館で開かれることを知っていた。同展に関連して、「石井正則写真展トークイベント」も予定され、その第1回が「ハンセン病療養所の写真と音楽」(3月8日)、第2回が「ハンセン病療養所の写真と詩⁶⁾」(4月19日)で、第1回にのみ「特別ゲスト」として阿部海太郎が出演するという。彼の音(CHINEMASHKA, CHIKA-CHIKA CHINEMASHKA, THEATRE MUSICA、2012年、音楽手帖、THEATRE MUSICA、2016年、など)が好きなたしは第1回の「トークイベント」を聞きたいとおもうも、事前申込制のそれは、2月24日の時点ですでにもうしこみが定員にたっていた⁶⁾。なんとも惜しまれる。

さらに残念なことに、2月28日付で、同館が翌29日から3月16日まで全館臨時休館となると、同館ホームページで発表された。「新型コロナウイルス感染防止のため」である。いいや、厳密に言えば、COVID-19をめぐる展開した、新型コロナウイルス感染症対策本部決定「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」(2月25日厚生労働省大臣発表)にいう「イベント等の開催について、現時点で全国一律の自粛要請を行うものではないが、専門家会議からの見解も踏まえ、地域や企業に対して、イベント等を主催する際には、感染拡大防止の観点から、感染の広がり、会場の状況等を踏まえ、開催の必要性を改めて検討するよう要請する」との提示から、日本国内閣総理大臣が発した「政府といたしましては、この1、2週間が感染拡大防止に極めて重要であることを踏まえ、多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については、大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後2週間は、中止、延期又は規模縮小等の対応を要請することといたします」との「イベントの開催に関するお願い」(2月26日)を経て⁷⁾、新型コロナウイルス感染症対策本部(第15回)での日本国内閣総理大臣による「ここ1、2週間が極めて重要な時

ポジトリで全文ウェブ閲覧可)。

⁶⁾ 「トークイベント」のフライヤによると、阿部海太郎は「ハンセン病療養所・長島愛生園との縁を機に、盲人の仲間とハーモニカバンド「青い鳥楽団」を結成した近藤宏一さんの音楽を知り、その足跡を追う活動「青い鳥のハモニカ」を2019年よりはじめる。今回は、石井さんによる近藤宏一さんの詩の朗読とあわせ、阿部さんの演奏をお届けします」との企画。くだんの「人気俳優」は「1994年お笑いコンビ「アリ to キリギリス」でデビュー。2016年解散後も、俳優、タレント、ナレーターとして幅広く活動中」だそうだ。

⁷⁾ 内閣官房のホームページの「新型コロナウイルス感染症の対応について」(2020年2月28日最終更新、同月29日閲覧)。

期であります。このため、政府といたしましては、何よりも、子どもたちの健康・安全を第一に考え、多くの子どもたちや教職員が、日常的に長時間集まることによる感染リスクにあらかじめ備える観点から、全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、来週3月2日から春休みまで、臨時休業を行うよう要請」(2月27日夜)⁸⁾したこともとづくものである、とみるべき事態なのである⁹⁾。

2月26日時点での同館ホームページの「重要なお知らせ」には、イベントの延期や中止も、また休館についても、その可能性すらまったく記されていない。それが一転したのだ。全館臨時休館にともない、3月8日開催予定だった第1回「トークイベント」も「中止」となった(ただし、「代替えの日程を設けるかどうかは現在検討中」とのこと)。

そののち、3月10日に「首相は首相官邸で開かれた政府の対策本部の会合で、「今後おおむね10日間程度の〔新型コロナウイルス感染症の拡大防止として要請している国内のスポーツ・文化イベントの開催自粛の取り組み〕の継続をお願いしたい」と述べた」と報じられると(たとえば、『朝日新聞』は3月11日朝刊東京本社版第1面で「東日本大震災9年／避難なお4.7万人、人口34万人減」の見出しの左に「イベント自粛「10日継続を」／特措法改正案 閣議決定／新型コロナ」の見出しをつけた)、それをうけて、同月12日付で、たとえば東京国立博物館は、「政府の要請により、新型コロナウイルス感染防止のため2月27日(木)から3月16日(月)まで臨時休館としていましたが、本措置を継続するよう、あらためて要請がありましたので、3月17日(火)以降も当面は臨時休館を延長いたします」と事態の経緯を、ホームページをとおして、率直、かつ的確に発信した。

⁸⁾ 首相官邸ホームページ(2020年2月29日閲覧)。

⁹⁾ 2020年3月2日参議院予算委員会で蓮舫(立憲・国民、新緑風会・社民)委員が一斉休業とした小学校などと開所する保育所などとの「感染リスク」の違いを、その「疫学的根拠」とともに問いかつ「なんで子どもの居場所で線引きしたのか」と質したところ、日本国内閣総理大臣は「疫学的な判断をするのは困難」と答えた。そののち厚生労働省の3月1日版「新型コロナウイルスの集団感染を防ぐために」では「集団感染の共通点は、特に、／「換気が悪く」、「人が密に集まって過ごすような空間」、「不特定多数の人が接触するおそれが高い場所」です」と告げ、NHK WEB NEWS「特設サイト／新型コロナウイルス」は3月9日付で「新型コロナウイルス対策の専門家会議は〔中略〕これまで感染が確認された場所に共通していた、「3つの条件の重なり」を示しました。／(1)換気の悪い密閉空間／(2)多くの人々が密集／(3)近距離での会話や発声／専門家会議は、日常生活の中で、この3つの条件が同時に重なるような場所や場面を避ける行動をとるよう呼びかけています」と報じた。のちに「3つの密」「3密」と呼ばれる警戒である。では図書館や図書室はこの「3つの条件の重なり」が当てはまる場所か、閲覧席や閲覧室はイベント会場か。

他方で国立ハンセン病資料館は、わたしが確認したかぎりでは同月13日付で、「新型コロナウイルス感染防止のため、2月29日（土）から全館臨時休館を行っています。／当初は3月16日（月）まで休館の予定でしたが、それを延長し、3月19日（木）まで全館休館といたします」とホームページに表示した。

ところで、博物館や資料館が開館すること自体が「イベント」に当たるのだろうか。

さきの「ひと」欄にもどると、そこには「 」つきで、「見に来た方々が『何だろう、これは』と感じる、心の種をまけたらいい」との記述がある。この日の同欄には、「 」つきの文が4か所にある。この「 」がついた記述のみが、「人気俳優」が語ったままの言葉なのか、よくわからない。それをおくとして、「本や資料を読んで分かったつもりになるより、現地に行こう」と思い立った「人気俳優」は、では、「見に来た方々が『何だろう、これは』と感じる、心の種をまいたそのあとで、いわば、その種から芽が出るよう、どのように促したり導いたり教えたりするのだろうか。「本や資料を読んで分かったつもりになる」ことは対象を理解するうえで危うい仕儀だとわたしもおもう。わたしはさらに、「現地に行」ったからといって、それだけで「分かったつもりになる」こともまた避けた方が、きっとよいとおもう¹⁰⁾。「本や資料を読」むことも、あたりまえに、必要である。「人気俳優」の比喻か、朝日新聞論説委員？編集委員？¹¹⁾のそれかにつきあえば、蒔いた「種」から芽を出すには、言葉が用いられるばあいがかならずある。撮った写真をどう説くのか、それが「詩」^{ことば}であってもよいし、あるいは、その言葉をもたずに写真をみせさえすればよい、というのであれば、それもまた立派な姿勢なのだろう。

「カラー中心に約100点を収めた写真集も出す」とのことだ¹²⁾。さきにみたとおり、「火

10) 阿部安成『大島ユリイカーハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園の歴史表象』滋賀大学経済学部研究叢書第52号（滋賀大学経済学部、2019年）を参照（滋賀大学附属図書館ホームページのリポジトリで全文ウェブ閲覧可）。

11) 「朝日新聞DIGITAL」の「記者ページ」に、「高木智子（論説委員）／朝日新聞の編集委員です。ハンセン病のことはこつこつと。犯罪被害者・加害者も。そして戦争の語り継ぎ。人を勇気づける記事、「いい話」をたくさん書いてゆきたいです。生まれは博多、現在のホームは大阪です」との記載（2020年3月1日閲覧）。「記者」でもあるのか？

12) 「石井正則（イシイマサノリ）|ホリプロオフィシャルサイト」に「【写真家・石井正則】写真集「13（サーティーン）ハンセン病療養所からの言葉」3月26日発売予定」の見出しで「俳優・タレントとして活躍する傍ら、フィルムカメラでハンセン病療養所の撮影を続けていた石井。国立ハンセン病資料館での写真展をきっかけに、自身初となる写真集を発売します。カラーネガ写真を中心に、ハンセン病療養所の入所者の方々の「詩」を掲載した、写真展とはまた違った作りになります」との宣伝があり、同写真集の出版元は

葬場や納骨堂、解体中の刑務所といった隔離の象徴のみならず、出会った人々の穏やかな表情を白黒で撮った」というのだから、カラーとモノクロームとの対照もまた、展示や写真集でみせられるのだろう。「隔離の象徴」と「優しさ」、「強さ」と弱さ、多色と白黒、といったいくつもの対照は人目を惹き、それをみるものこのころに「種」が蒔かれたと感じた気になる格好の装置となるだろう。そうした体験をとおして、「つもり」ではない、どういった「分かった」に到り得るのか——楽しみな写真展だ、臨時休館明けを待とう。

「社会社説担当」　楽しみな写真展だ、臨時休館明けを待とう——と書いたのちの3月15日付『朝日新聞』朝刊「社説余滴」が「社会社説担当」の高木智子の執筆だった。見出しは、「分からない」を思う。クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号乗客の感慨（「自由って、貴重」「上陸して涙が出た。窮屈だった。早く家に帰りたい」）にふれて「かつてのハンセン病隔離政策の犠牲者」のことが「頭をよぎった」ので、「元患者〔中略〕に連絡をと」と、「わたしの隔離とは違うなあ。出られるんだから。わたしの本当のつらさは分からんと思うよ」の言葉をうけ、彼ら「夫妻は隔離施設で中絶を強要され、我が子を亡くしている。薬ができて治ったのに、留め置かれてきた」こと、彼ら「病歴者だけではない。家族も汚いもの扱いされ、家は消毒まみれ、近寄る人もなく、いじめられた」ことを記し、「見た目に変形を残す、よく分からない病。偏見に加えて、国や自治体に不安をあおられ、一人ひとりが差別に加担した」と説く。

ついで、「おりしも」と、「その過去を伝える写真展が企画されている」と、「俳優の石井正則さん（46）が全国の隔離の傷痕を訪ね、白黒フィルムに収めてきた」と紹介される（その写真展が、いつ、どこで、開かれるのかは記されない）。「だが」と逆接の語をおいたそのつぎに、「作品を並べたところで、コロナによる自粛の嵐で延期している」ので、「おりしも」ということなのだ。すでにみたとおり、これは国立ハンセン病資料館で予定されていた写真展で、この「俳優」は「東北から沖縄の宮古島まで療養所と呼ばれる13施設」

トランスビューとのこと。同出版社ホームページには、「全国に13ある国立ハンセン病療養所には、その記憶を色濃く残した「風景」とその中でしか生まれえなかった「言葉」がある。／〔中略〕各地を訪れた石井正則はそこで感じた「空気」を写真に収めてきた。〔中略〕／カラーフィルムで撮影した約100点の写真に、入所者の方々の力強い詩23篇を掲載」との説明があった（サイトはどちらも2020年3月11日閲覧）。「入所者の方々」の詩も「力強」さを厳選か。

を訪ねたとすでに報じられていた。さて、「療養所と呼ばれる13施設」は「隔離の傷痕」でしかないのか。当然この形容は、記事の文脈では、陽・陰、明・暗、正・負という対照の後者と同義だ。

目に見えない記憶を撮る感覚だったという。作品は、人間が人間の尊厳を踏みじった現場を伝えるせいか、陰影深く、もの悲しい。石井さんは言う。「僕らには分からないということが分かりました。その分からないことを伝えたい」

——「社会社説担当」ともなると、わずか900字でいどの短い文章で、あれもこれもを報道し得る技量が要求されるのだろうから、それは凄腕といってもよいはずだ。「俳優」がのべたという「僕らには分からないということが分かりました。その分からないことを伝えたい」とは、なにをいっていることとなるのか、それをめぐってなにを説くか。

「社会社説担当」は、「俳優」が撮った写真「作品を見ながら、ふと」、さきの「元患者」の「温和な顔が浮かび、その裏にある、分かり得ない痛みを想像した」とみずからの心情をあらわして、「怖さが先立ち、防御するあまり、不寛容になり、排除した。そして、分かるとうもしなかつた。ハンセン病の教訓を胸に、今、あふれる情報を見極め、冷静でいたい」と記した記事が、さきの「想像」をめぐるところのありようの中身であり、それをふまえて「社会社説担当」として世に告げる指針、姿勢、意思、ということなのだろう。

だがこれでは、「怖さが先立ち、防御するあまり、不寛容になり、排除した。そして、分かるとうもしなかつた」ことがらや事態にたいして、「冷静」に「あふれる情報を見極め」れば、それは「分か」り得て、「怖」がることなく、「寛容になり、排除」せずに済む、となりはしないか。もちろん、そうした「冷静」な態度や姿勢や意思は望ましい。けれども、「ハンセン病の教訓」とはそこにとどまらず、また、さきに記された「俳優」の言はそうとだけうけとめればよいのではないとおもう。

さきの「俳優」の言をていねいに書き直すと——ハンセン病をめぐっては、ぼくらには、どうにもわからないことがある、(α) そのわかり得ないということそのものを伝えたい、(Ω) そのわからないことをどうにかしてわかって(あるいは、わかったこととして)、そのわかったことを伝えたい、となるのではないか。もとよりこの(α)と(Ω)とは截然と分かれたるものではないともいえる。ただ、わたしには前記二者のうち、「俳優」の言は(α)の意味あいが強いように感じた。そうした考えの広がりを見据えてこの「社説余滴」

が記されたのだとしたら、やはり「社会社説担当」の凄腕に感嘆する。

「社会社説担当」は「社説余滴」欄の最終段落を、「感染も隔離も「我が事」になった」と記し始めた——その「なった」とは、いつの、ことなのか、「おりしも」ようやくいま、そうなったというのか。そうであれば、「人々が気づかないうちに感染し、感染拡大に重大な役割を果たすという特徴がある」（「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議「新型コロナウイルス感染症対策の見解」2020年3月9日）COVID-19に直面して初めて、「感染も隔離も「我が事」になった」と自覚したこととなり、それとは異なるハンセン病をめぐる¹³⁾は、自分が、それをひとに伝染することも、自分がそれに罹って隔離されることも想定されないから、「我が事」とはならなかったということか。仏の顔も三度、どころか、ふたたびくりかえされることへの懐疑や憤慨であれば、この「社説余滴」とおなじ日の紙面別面にみえる「朝日歌壇」でとりあげられた一首——「この国が「想定外」に弱きことフクシマでもう知っていたのに」（水戸市、中原千絵子）も表明済みだ¹³⁾。べつに「社会社説担当」というたいそうな肩書など必要はない。「感染も隔離も」、「おりしも」いまようやく、「我が事」になった」では、遅いのだ。過ぎたことをとやかくいっても仕方ない、というのであれば、せめて遅きに失したとの反省が必要だ。

ハンセン病に罹らずに済んだわたしたちは、しかし、ハンセン病に罹った人びとを隔離した当事者としての自覚をもつ必要がある、とわたしは考える。隔離の体験者が、隔離された側の当事者が、「わしらの本当のつらさは分かんと思うよ」というとき、隔離を体験していないわたしたちは、隔離した側の当事者として、体験者が「分かんと思うよ」といまなおそういわざるを得ないそのこと自体を「分か」るように努めなければならない。そして、「よく分からない病」だったというハンセン病については、明らかになったことがらが増えていった。けれども、その病がもたらしたこと、その病に罹ったひとたちの生活のすがたやこころのありよう、その病に罹ったひとたちに罹らなかったひとたちがなにをしてきたのか、隔離施設である療養所とはいったいなにだったのか、その歴史はいまどのように知られようとしているのか伝えられようとしているのか、そうした歴史を報せたり伝えたりする手立てはいまどのように整えられているのかいないのか、はどれほど「分

13) この一首は馬場あき子と佐佐木幸綱ふたりの選者によって「共選作」に選ばれ、「不信感」のあらわれ（前者）と「批評性がきわだつ」（後者）ゆえの選と評された。

か」っているのか、それらをわたしたちはどのように知っているといい得るのか。

ハンセン病について書かれたものを読んだり、ハンセン病施設にいたり、そこにいま暮らす人びとに会ったり話したりすれば、なにかしらを知り得るだろうし、知ればそのなにかしらをだれかに伝えたい報せたいとおもうことだろう。だがそのことと、そのなにかしらを「分か」ることとは、いくらか、あるいは大いに違うのではないか、そのあいだにはまだまだ埋めがたい隔たりがあると、わたしはおもう。

ところで、「社説余滴」欄には、「元患者」との呼称が記されてあった。ハンセン病をめぐる療養所をいまも生きる人びとは、いったいつまで「元患者」と呼ばれなければならないのか。そう呼ぶものは、ほとんどのばあい、療養所の外にいるものたちだ。なぜ、彼ら彼女たちを「元患者」と外から呼びつづけるのか、そう呼びつづけるものは、それを自問したことが、あるのか？それともうひとつ、ハンセン病は「感染症」なのか¹⁴⁾？

いま 2020年3月31日に、amazonのホームページ「本」で「石井正則」を入力、検索すると、「13 (サーティーン) : ハンセン病療養所からの言葉 (日本語) 単行本-2020/3/30」がヒット、¥3,190。同ホームページでは、「7点すべてのイメージを見る」ことができ、クリックすると、076と077のページ・ノンブルとおもわれる数字が打たれた画像に変わり、ノンブル077の画像に写るようすは大島の海岸のようにみえる。おなじく076の画像には、島村静雨の「海と断層」と題された詩が載る。島村は国立療養所大島青松園の在住者ではないとおもう。この詩は、『愛生』通巻第432号(長島愛生園慰安会、1976年10月)に、大江満雄選「詩」の島村静雨「海四題」の「I 海と断層」として載る。

同ホームページの「著者について」の2段落めには、「本写真集に掲載の作品は、プライベートの時間に全国13カ所の国立ハンセン病療養所を訪れ、8×10大判カメラや35mmフィルムカメラで撮影したもの。2020年2～5月、国立ハンセン病資料館にて写真展「13～ハンセン病療養所の現在を撮る～」を開催」との記載あり。

¹⁴⁾「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」(1998年公布、1999年施行)はその第6条「定義等」においてハンセン病を対象としていない。ただし同法前文で「我が国においては、過去にハンセン病、後天性免疫不全症候群等の感染症の患者等に対するいわれのない差別や偏見が存在したという事実を重く受け止め、これを教訓として今後にかつて生かすことが必要である」と記されている。とはいえ、「らい予防法」が現行法であるときはもっぱら「伝染病」の語が用いられたはずである。

同日、国立ハンセン病資料館のホームページをみる。「全館臨時休館の再延長のお知らせ」とのおおきな見出しがあり、「新型コロナウイルス感染防止のため2月29日（土）から3月19日（木）まで休館していましたが、当面の間、臨時休館を延長いたします」との告知があり、そのしたにある「開館カレンダー」は表示のある4月4日（土）までが「休館日」をあらわす色で塗りつぶされていた¹⁵⁾。「全館臨時休館の再延長のお知らせ」をクリックすると、いくつかある情報のうちのひとつに、「特別展／石井正則写真展「13（サーティーン）～ハンセン病療養所の現在を撮る～／会期：調整中」とみえた。

CiNii で検索したところ、さきの「社会社説担当」の執筆稿がヒットした。新聞紙上の同人の署名記事はそれなりに目をとおしたし、同人の著書も読んでいたが、逐次刊行物掲載稿は未見だった。同人の執筆稿4編の複写依頼を2020年4月12日に出し、同月14日、15日と順次それらが到着し、16日に4編のコピーを落掌した。本稿の論点にかかわるかぎり、それらの稿をみるとしよう。

同人の「共感ジャーナリズムーハンセン病報道から考える」（『歴史地理教育』第854号、2016年9月）を読み、驚いた。そこには、「呼称について、ここではハンセン病の「元患者」「回復者」とは記述していない。新聞紙上でも、私は出来るかぎり、使わないようにしている」とあったからだ。同人はまた、「私は「元患者」〔の語〕を使わず紙面で表現できるか、チャレンジしている。肩書〔をつけること〕が時にレッテル〔貼り〕につながる懸念からだ。たとえば「元患者」を「ハンセン病だった」等と置き換えるだけで、印象は異なるだろう」とも記していた。この稿の発表から4年も経たないところでの「社説余滴」執筆において、わずか1か所での「元患者」の語の使用とはいえ、なにかあったのか。「社説余滴」にみえる、「元患者の」だれ（と実名をあげて）「さん（83）に連絡をとった」を、ハンセン病だっただれさん（83）に連絡をとった、となぜしなかったのか。「社説余滴」では、「元患者」とおなじ対象（集合名詞）への呼称として「犠牲者」「病歴者」の語も用いられているのだから、「元患者」は代替不可能で絶対に必要な語ではないはずだ。

同人があげたこの呼称をめぐる懸念は、「裁判〔いわゆる「らい予防法違憲国家賠償請求

¹⁵⁾ 4月2日同ホームページ閲覧時にトップページの表記はかわらず、「開館カレンダー」は4月13日まで休館日の色塗り。現状では「当面の間」開くことはないのだろう。たまたま見た『水曜どうでしょう』『北海道で家、建てます』最終夜（ABC朝日放送、2020年4月1日1:39～2:14）でおおよそ、雪掻きはかならず終わる、といった発言を聞いた。

訴訟」に勝訴して数年後、「私たちはいつまで元患者と呼ばれるのか」と問われたことがある。社会の理解は以前より進んでいるのに、「元患者」と呼ばれ続けることへのいらだちだ。確かに、ハンセン病以外の病で治った人に〔人を、か?〕「元患者」と呼んできただろうか」とあげられたとおり、当事者がとなえた異議とそれへの同意があったはずなのだ。この同意はまた「自らの先入観と向き合う」（同稿内の見出し）との同人の姿勢にもつながる。同人は当事者を「取材する自分が先入観でがんじがらめになっていることに愕然とした」体験をふまえて、みずからを問い直した——「ハンセン病とは、被害者とは、こういうものだと思いこんでいないか。発見する努力や工夫を怠っていないか。そんな疑問が頭をもたげ」た。この「疑問」はさらに、「誰のために、何をどう報道するのか考え」るに到り、その答えとして「ハンセン病だった人たちのために、名誉回復のために、報じるしかないだろう」との使命をみずからに課した（傍点は引用者）¹⁶⁾。

報道に従事するものが、対象とするものの「名誉回復のために」を、みずからの職分としてかかげることはよいだろうし、ほかでもたとえば、国立ハンセン病資料館が、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」にもとづく館の「目的」として「患者・元患者の名誉回復を図ること」をあげる必要もある。だが、研究という業務となると、もちろんハンセン病問題の当事者であり不当に隔離されたものたちの名誉回復を目指しながらも、しかしそこにだけとどまっていたり、そこにのみ集中したりするとしたら、それでは不十分だと、わたしは考える。理由は単純で、それでは研究がハンセン病被害者への奉仕にかぎられてしまい、そのことと、ハンセン病をめぐる問題を明らかにすることとを分けるべきと考えるからである。

さて、では、さきの稿の表題にいう「共感ジャーナリズム」とは、「ハンセン病だった人たち」に「共感」する「ジャーナリズム」を目指すとの謂なのか。それについて考えようと本文をみても、表題に用いられた「共感」の語は、本文にはわずか1か所にしか記されていない——

偏見の解消は、世間の応援と理解なしに成立しない。彼らへの共感につながる報道が求められている。〔傍点は引用者〕

よい言葉だ。

16) 感謝の言葉しかありません——というたぐいの表現が、わたしはとても気になる。

「共感」とは、だれかとだれかがともに感じるようすをいうはずで、したがって、この語を用いるときには、だれかの、だれかへの、感じが、ともにある、ようすをあらわしていることとなり、メディアはまさにそのあいだにある媒介となるものなのだ。

だがじつは、ここにみえる「彼ら」がだれを指しているのか、よくわからない、だれとだれとの「共感」を考えているのかも、わかりづらい。同稿に登場する人びと（agency）の数は3（のはず）——「ハンセン病だった人たち」、「世間の人たち」、「ジャーナリズム」「メディア」のひとたち。そうであれば、同稿にいう構図は、しごく単純に、「世間のひとたち」が「ハンセン病だった人たち」に「共感」する、その媒介に「ジャーナリズム」「メディア」がある、となるはずだろう。

「偏見の解消は、世間の応援と理解なしに成立しない」のだから、「ハンセン病だった人たち」への「共感につながる報道が求められている」と読むべきなのか。さきの引用2行にみえる「彼ら」とはだれを指すか、6文字以内で答えよ、と入学試験問題国語に出したら、受験生はどういった解答をひねり出すか。

この「共感」の2文字は、同稿発表からおおよそ1年後に逐次刊行物に掲載された「記憶の継承—過去に無頓着にならないために」（「わたしの視点—メディアの現場から」第18回、『ヒューマンライツ』第352号、2017年7月）にも継がれ、「差別をなくすこと、人権を守ることは、報道の使命である。世間の共感を広げるためにも当事者の「語り」は欠かせない」とか、「人間が人間らしく扱われなかった過去に無頓着にならないためにも、メディアは日々、通り一遍ではなく工夫をした伝え方が必要で〔中略〕社会の共感と理解なしには、差別も偏見も減らない」とか、いう（傍点は引用者）。ここで（2か所での使用!）もやはり、なにとの「共感」なのかが明示されていない。それは自明のことであり、あえて記すまでもないということか。

同人は前掲稿「共感ジャーナリズム」で「呼称について」、「元患者」ともうひとつ「療養所」をもあげていた。「実態は労働をさせられたり偽名を強要されたりした歴史がある」のだから、ハンセン病をめぐる施設に「療養」の語がふさわしいのかというわけだ。こうした「呼称について」は、「うまく言い換えができることもあるし、できないこともあるが、少しでも世間の人たちがイメージしやすいような創意工夫が求められている」という。「元患者」の「呼称」の「言い換え」は当事者からの異議がきっかけだったはずなのだが、そ

れがここでは、「世間の人たちがイメージしやすい」配慮へと転化している。

同稿はその始まりが、「「難しそう」「もう終わった問題だよね」。よくこんな声を耳にする。きっと世間の大半がハンセン病のことをそう思っているのだろう。どうすれば世間の人に、ハンセン病だった人たちがいまも救済できない被害を生きている現実に気付いてもらえるのか」(傍点は引用者)との文章だった。執筆者の耳がことさらに聡いのか、わたしの周囲の大学生がどうにも鈍いのか、わたしが講義をする教室には難易どころか、ハンセン病など聞いたこともない、まるで知らないとの声が響く。それはともかくも、同人が考えるメディアの使命はハンセン病だったひとたちの名誉回復にほかならないとしても、いわばメディアが駆使するペン先は「世間」にむけられていたのだ。いいや、もっといえば、メディアのむかう方向に「世間」をすえるというよりは、メディアが「共感」すべき相手として「世間」があると読まれかねない稿とみえてしまうのだ。

同人はいう——「当事者や研究者らが当たり前のように使っている言葉や用語も、療養所に行ったことがない、当事者と話をしたこともない、いわゆる「世間」の人には馴染みがないことを念頭においたほうがよい」との戒めである。さきにみたとおり、このあとの発表となる前掲稿「記憶の継承」では、「世間の共感を広げるためにも当事者の「語り」は欠かせない」とその「語り」の尊重がうたえられるのだが、「共感ジャーナリズム」を説くところでは、「当事者〔中略〕が当たり前のように使っている言葉や用語」すらもが、検討対象となっていたのだ。もちろんそうした再考は必要だし、当事者とはいえその「語り」を絶対視しない観点も重要だ。だが、執筆者の姿勢が定まらないようにみえてしまう。

ただ、さきに「欠かせない」道具立てと想定されていた「当事者の「語り」」もそれが困難になりつつあるいま、さてどうするかとの模索につながり、そこでの代替としてあげられていたのが、「菊池恵楓園の絵画クラブ」¹⁷⁾が残した作品群、「瀬戸内海の島々を舞台にした現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭」」、「岡山の長島愛生園で〔中略〕「世界遺産」登録を目指す運動」である。近年「アクティビティ」といわれる、ひとの動きをとまなう活動やその成果などへの着目で、おおまかにいうと、たんに文字で記された記録な

17) 国立ハンセン病資料館の2019年度春季企画展として「キャンパスに集う—菊池恵楓園・金陽会絵画展」(4月27日～7月31日)が開かれ、あわせて全6弾におよぶ「付帯事業」も実施された。またNHK Eテレの『日曜美術館』では2019年11月17日に「光の絵画 ハンセン病療養所・恵楓園絵画クラブ“金陽会”」が放送された。

どにとどまらず広く人びとの活動をとらえようとする動向である。

「かつて来訪者さえいなかった療養所に学生をはじめ大勢の人が訪れ、語らいが生まれている。笑顔が増えた。これは劇的な変化で、希望も感じる」とか、「療養所を人権侵害の現場として後世に残す世界遺産登録運動や、隔離の島も参加する「瀬戸内国際芸術祭」から論じること、若い人には親しみやすいだろう」とか、これらもまた「世間」や「社会」の「共感」の証だと言祝がれるであろう出来事^{イベント}がもちあげられるが、その一方でわたしには、過去が歪められるとの危惧をぬぐうことができない。療養所に「かつて来訪者さえいなかった」とは事実なのか、「瀬戸内国際芸術祭」には、療養所の創設から約九〇年にわたって閉ざされてきた大島も参加している。寄りつく人もいなかった島で、アーティストが創作活動を始める」というとき、大島が「寄りつく人もいなかった島」だという事実があるのか。こうしてくりかえし、「かつて来訪者さえいなかった」「寄りつく人もいなかった」と記されることで、ハンセン病をめぐる療養所がある大島の過去が、「閉ざされてきた」いわば完全封鎖の隔離の島とみられてしまうことを、わたしは怖れる。

少なくとも、わたしが調査と研究のフィールドとした大島には、ちょっとだけでも調べればすぐにわかるとおり、「かつて来訪者」が確かにいたし、間違いなく「寄りつく人もいた」のだ。隔離の島であるという事実と、そこへの「来訪者」がいたという事実とを、どちらも、忘れて歪めたりしてはならない。

余 瀝 本稿冒頭でとりあげた、「人気俳優」が「これは撮りに行くことになるんだろうな」と感じたきっかけの「ドキュメンタリー番組」がその映像を流した「解剖台」は、当時、国立療養所大島青松園を調査と研究のフィールドとしていたわたしにとっても、すこぶる驚きの遺物だった。ハンセン病をめぐる国立療養所でかつて、そこで亡くなったひとを解剖していたことは、ハンセン病史に関心をもつひとには、つとに知られていたことがらである。その解剖のための備品のひとつがいまも療養所の島にあり、しかしそれは廃棄物として海岸にずっとあったということが、わたしの驚愕のどあいを増大させ、その解剖台をめぐる事態をいくつかの稿において記録することとなった¹⁸⁾。

18) ①阿部安成「解剖台 現一国立療養所大島青松園と瀬戸内国際芸術祭 2010 と展示作品解剖台」(Working Paper Series No.140、滋賀大学経済学部、2010年10月)、②同「悲

そのうちのひとつの稿が、「[研究論文] ハンセン病療養所の将来像に関する展望と課題：「負の遺産」の継承を考える」（『現代史研究』第14号、東洋英和女学院大学現代史研究所、2018年3月）と題された稿の「参考文献リスト」にあがっていた¹⁹⁾。ただし、共著者ひとりの著者名が「安部安成」、論題名が「コンクリート魂の牽引—瀬戸内国際芸術祭 2010 の解剖台展示とハンセン病療養所での死をめぐる生活環境」と記されていた。論題名の7文字めに注目。「療養所での死をめぐる生活環境」を論じた稿だから、その論題が「コンクリート魂」だということか？

この「参考文献リスト」には、ほかにも奇妙な記述が多い——さっと走り読みしたかぎりでも、①「山川出版」という名称の出版社があるのか？（あの歴史教科書で有名な）、②蘭由岐子の著作の刊行年は「2006年」か？（初版？何刷？）、③『ミュージアムと負の記憶』は竹沢尚一郎の単著か？同書に副題はないか？、④「注」にも奇妙な表記があり、たとえば「参考文献リスト」での蘭の著作名にある表記「病いの経験」「ライフストーリー」が「注」では「病の経験」「ライフストーリー」と変わっている、⑤「注」にみえる「リデル、ライト両史記念館」という名称の施設はこの世のどこかにあるのか？

さらに指摘すると——その「研究論文」本文「4.2」で、「大島が初めて瀬戸内国際芸術祭に参加した2010年には、海に棄てられていて砂浜に打ち上げられていた「解剖台」が展示されており、このことは、賛否両論が激しくかわされた」の1文（なんとも落ち着いた悪い文だ）につけられた「注」にわたしの執筆稿があがっている。だが、わたしはその稿で、展示をめぐる「激しくかわされた」という「賛否両論」にはまったくふれもしていない。同稿に「賛否両論」の語はなく、「賛」の字があってもそれは「賛辞」の熟語で使っているにすぎない。厳密に言えば、「注」ではわたしの稿をあげたうえで、「例えば」「など」と記しているので、解剖台展示をめぐる「賛否両論が激しくかわされた」と指摘し

しみの根、悲しさのゆくて—瀬戸内国際芸術祭 2010 展示作品解剖台が涙を誘った」（同前 No.141、同前、同年12月）、③阿部安成、石居人也、脇林清「コンクリート魂の牽引—瀬戸内国際芸術祭 2010 の解剖台展示とハンセン病療養所での死をめぐる生活環境」（『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第8巻第1号、2011年）、④阿部安成「わたしたちは、彼らふたりの名を記さなかった—癩そしてハンセン病をめぐる療養所での在園者との語らいを考える」（Working Paper Series No.154、滋賀大学経済学部、2011年8月）、⑤同「さあ、「解剖台の歴史」について、お勉強しましょう—瀬戸内国際芸術祭 2010 大島会場の展示作品をめぐる考現学」（同前 No.157、同前、同年10月）。

¹⁹⁾ なぜか「東洋英和女学院大学学術リポジトリ」には同紀要の第1号、第2号、第4号、

た稿は複数あるということだ。しかし、その代表にわたしの稿をあげることは適切ではない、いいや、間違っている（事実でないにもかかわらず、事実であるかのようになにかをこしらえることを、捏造という）。

わたしは、「解剖台の展示は現在も賛否両論あります」という1文（これも舌っ足らずのへんな文だ）がある稿の執筆者名、掲載誌名、その発行年月を示すことができる（が、ここではしない）。その1文が載る稿は、この「研究論文」の「注」にも「参考文献リスト」にもあがっていない。もうひとつつうと、その「研究論文」からさきに引用した「賛否両論」云々のつぎにあるふたつの文——「大島青松園には、実はもう一つ解剖台があったという。もう一つは土に埋められてしまったそうだ」との記述の出典はなにか？「という」「そうだ」とわざわざ記しているのだから、これは執筆者自身が確かめてはいないわけだ。わたしがみたかぎり、解剖台が引き揚げられ展示された当時、「もう一つ解剖台があった」ことにふれた報道はひとつもなかった。国立療養所大島青松園にはかつて解剖台が2台あった——これを書き記した文献もまた、わたしはそれがなにかを知っている（が、ここには明かさない）。

ほかにもこの「研究論文」には、ささっと小走り読みしたかぎりでも、「近代ハンセン病略史」と題した年表（しかもわずか13年分の項しか載っていない。しかも「1.4」=第1章第4節の記述はその略史年表のみ！）を記すにも、それをほかの著述を典拠としたり（「注」を打っているだけ立派だが、しかしどうせ参照するのであればもっとほかに適切な文献があるだろうに。しかし年表中にある「大島良所」とはなにか？）、「公文類聚」に「注」を打ったり（注を打つことそれ自体が不思議で、もちろんそれがなにか一般には知られてはいないが、しかしその「注」の文章がたとえば「レファレンス協同データベース」（2020年4月13日閲覧）にみえる「回答」の記述とほぼおなじであることは適切か。ほかのどれかによってどこかに書かれた文章を、そうとは明示せずにあたかも自分が書いたかのようにはみせたり、そううけとられてもしかたないようにしてしまったりすることを、剽窃という）、なにより20ページにわたる本文のうち、「1.はじめに」が8と2/3ページほど、「2.先行研究と研究の位置付け」がおおよそ5ページで、この「1.」「2.」で全体の7割ほどの紙幅を占めてしまったりするなど、これは執筆者の肩書である「講師」にふさわしい水準の、

第14号が収録されていないため閲覧できない（2020年4月22日確認）。

また大学の附置施設であろう研究所が編集発行する紀要に載せてよい体裁と内容の「研究論文」なのか。しかも「本稿の研究の一部は、2017年度東洋英和女学院大学研究助成（個人研究）による成果の一部である」とのこと。「一部」の「一部」とはいえ「助成」の「成果」足り得るのか。

「大学・研究機関が発行する研究紀要」にたいして、「大学の先生たちが、勤務報告代わり（失礼！）[助成成果というばあいもある！わたしのこの稿もそう!!]に論文を発表している学内雑誌といえよう。ハウス・ジャーナルと呼ばれる所以である。このため、研究論文のグレードやレベルに幅があり、学協会誌よりは採択の難度が落ちるものが多いといわれている。つまり、品質保証の点で全国学協会誌ほどではないものが含まれるということだ。強烈な高水準の論文が並ぶものから、無審査で掲載されるものまで「ピンキリ」の世界らしい」との懐疑、あるいは揶揄が載る『図書館に訊け！』（井上真琴、筑摩書房、2004年）がちくま新書の1冊にある。著者は大学卒業後、「図書館の隠密」を志し、大学附属図書館で「レファレンス業務を担当。傍ら」、自治体の「文化財行政にも携わり」、「稀覯本（古書）をこよなく愛する一方、民間研究団体の電子図書館実験実証プロジェクトによる欧米図書館派遣調査に参加するなど、図書館業務の最先端に通じている。資料の評価と探索ではつとに知られた存在」で、この著作で「2006年度私立大学図書館協会賞を受賞し」ている（同書裏表紙。わたしが手にした同書は2015年第11刷）。

さきの引用箇所には「いえよう」「いわれている」「らしい」の語がならぶが、著者の経歴からすれば、……学内雑誌である、……落ちるものが多い、……「ピンキリ」の世界だ、と記せる情報と知見とが同人にはあるはずだ（もっとも、「品質保証の点で全国学協会誌ほどではないものが含まれるということだ」との断言もあった）。さきにわたしは、引用箇所をして、懐疑、あるいは揶揄、ととらえたが、これは正当な指摘とうけとめるべきである。その確かさの例証となる意義が、さきの研究紀要掲載の「研究論文」にはある。

なお、本稿の Working Paper Series とは、かつてわたしが大学生や大学院生として過ごした文学部や社会学研究科にはなかった、もしかすると経済系学部特有の媒体で、「学協会誌よりは採択の難度が落ちるものが多いといわれている」「大学・研究機関が発行する研究紀要」よりもさらに「採択の難易度が落ちる」とわたしはおもっている、Discussion Paper などの名称もある媒体である。

柵 4月になってから、『朋』第54号=『SSTL』通巻第4891号（ハンセン病文庫・朋の会編、埼玉県障害者団体定期刊行物協会、2020年3月28日）をあらためて手にとり、「隔離の象徴として〔国立療養所多磨全生〕園の周囲約六六〇メートルにわたり植えられた柵の垣根は、二〇二〇年二月一八日頃、突然倒され、二週間あまりで根こそぎなくなっていました」と伝える記事を読んだ（【アピール】<http://chng.it/Q4jHS8qn>より転載／ハンセン病問題を次の世代に伝えるため、多磨全生園に残る樹木や建物を残してほしい！）。「国立ハンセン病療養所多磨全生園の外周を囲むように、柵の垣根はありました。〔中略〕／柵の垣根は、療養所の中と社会を隔てるいわば「壁」であり、高いときには三メートルの高さがあったと言」うそれについて、「私たちが作業に気づいたのは二〇二〇年二月一八日、それから一週間ほどでほとんどの垣根は伐根されてしまいました」——わたしが、バス停留所「ハンセン病資料館」のところからみた光景は、伐採が始まって1週間が経とうとするころのようすだったこととなる。

本稿冒頭でわたしは、取り除かれた垣根は「一部」だと、とくに根拠があって書いたわけではないのだが、同紙の記事もまた垣根のすべてかその一部なのか、「根こそぎなくなってしまう」ったその範囲が明瞭ではない。この「アピール」は、「柵の垣根のみならず、多磨全生園のなかにはたくさんの樹木・建物・史跡があり、そのすべては、国の隔離政策がどういうものであったのかを示す歴史的資料です。／私たちは、国や社会が何をしてきたのかを残すことに意味があると思っています」とうたっていた。

賑賑しく喧伝される「人気俳優」の「写真」と違って、また「国際」規模の芸術祭とも「世界」規模の「遺産登録運動」とも異なる、地味で目立たない樹木の保存活動は、「社会社説担当」の目にとまらなかったか。出かけてたまたま知ったわたしも、他者のことはいえないが。

おわりにかえて 「過去に無頓着にならないために」と「社会社説担当」がみずからに課す戒めにあらわれる自己の律し方に、わたしは共感する。そのために、「自らの先入観と向き合」おうとする姿勢を、わたしも共有したい。ここにいう「先入観」とはたとえば、「メディアは「ハンセン病問題」「過酷な人生被害」を伝えようとするあまり、喜怒哀楽の

「怒」「哀」にフォーカスしがち」となる観点である。様相の特定の面、あるいは一面しかみていないということだ。このようにみずからを省みようとする姿勢が大事だとおもうものの、しかし、それを説くこの「社会社説担当」の文章をあちこちにみると、そのあいだにあるくい違いが、どうにも気になって仕方がない。

ひとつの稿には、ハンセン病をめぐる多くのひとたちが用いる「元患者」の語をなんとなくもなく使い、またべつの稿では、その語を使うことを、当事者の異議をふまえて躊躇い、避ける。「先入観」を押しつけよう退けようとなえながらも、その一方で、療養所がある島を絶対閉鎖の空間とあらわしてやめない。そうした記しぶりは、ハンセン病をめぐるいくどもくりかえしもとめられる、「ハンセン病について正しい知識を持とう」という「学習のポイント」²⁰⁾ともひどくずれてしまう。

「世間」や「社会」が好むということであれば、ハンセン病をめぐる療養所の様相が悲惨である方が適しているといえるのかもしれない。そうした悲惨さのなかに、一縷の望みがある、一筋の光が射している、となればなお「世間」や「社会」の耳目を惹くのかもしれない。けれどもそれで、ハンセン病をめぐる「全体像」をとらえ、それをあらわしきれているといえるのか（前掲「記憶の継承」）、「日本の隔離政策の下で、人間の尊厳がどう奪われてきたのか。その構造的、歴史的な事実を検証」し得たといえるのか（前掲「共感ジャーナリズム」）。「社会社説担当」もそうはみなさないはずだ。同人の言をくりかえし参照すれば、「世間の共感を広げるためにも」、また「差別も偏見も減ら」すためには「社会の共感と理解」が必要であるとはそのとおりで、そのうえでなお、「少しでも世間の人たちがイメージしやすいような創意工夫」を凝らそうとするとき、それが、ただ「世間の人たちがイメージしやすい」ところを（世間で好まれるいい方を使えば）いわゆる落としどころとしてみせさえすればよい、となってしまうのは、「全体像」も「構造的、歴史的な事実」も掌からぼろぼろとこぼれ落ちてゆくであろうことを、わたしは怖れる。

また、療養所を「閉ざされた」とする見方は、なにより当事者である療養所在住者の実感にほかならない。それは直截に、大島青松園入園者自治会が編集した同会の五十年史である『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（大島青松園入園者自治会（協和会）、1981年）の書名にあらわれている。

²⁰⁾ 「ハンセン病の向こう側」（厚生労働省、2019年）。

けれども、「全体像」であれ「構造的、歴史的な事実」であれ、それらを得ようとするのであれば、ときに「世間」や「社会」の「イメージ」や願望や期待を裏切るような療養所や療養者の像を、きちんと史料をふまえて提示しなければならないし、さらには、当事者である「ハンセン病だった人たち」の気に障る、気持ちを逆撫でする怖れのある療養所や療養者をめぐると実証と論理にもとづく論を立てることも必要となるかもしれない。それらを果たし得たとき初めてわたしたちは、療養所の外にいる、隔離をした側のものとして²¹⁾、ハンセン病をめぐると過去や歴史に頓着しているといい得るのだとおもう。

「人気俳優」と呼ばれるひとが世間にどのくらいいるのか、また、朝日新聞社内に「社会社説担当」がいくにんいるのか、わたしは知らない。員数の多寡はともかくも、本稿でとりあげたふたりは、著名人^{モレブ}とあってよいだろう。「人気俳優」は「お笑い」や「ナレーター」もその業としていたというのだから、言葉や声を駆使するひとだった。その「人気俳優」が写真にも手を伸ばしたとなれば、それは異種異業への挑戦だったのか趣味の延長だったのか、それはともかくも、なにはともあれハンセン病施設をめぐりそこを撮ったのだった。「人気俳優」は、写真を撮影しながらか、撮ったあとの写真を整理したりそれをもとに考えたりするなかでか、どこかしらで、「僕らには分からないということが分かりました」と気づいたのだ。これはとても重要な発見とでもいうべき体験である。

新聞社につとめる「社会社説担当」も、「人気俳優」のその体験に着目したからこそ、自分が執筆した「社説余滴」欄の文章に「「分からない」を思う」との題をつけたのだろう。だが同人の言述をあれこれ見渡すと、執筆を業とする職にあるはずなのに、どうにも、文体が不安定で、歪^{ひず}んでいるといたくなる体たらくにみえる。わたしにはもうひとつ、さきにみた「人を勇気づける記事、「いい話」をたくさん書いてゆきたい」という同人の姿勢も気になる。新聞記者であろうとだれであろうと、みずからの意思と好みと、ばあいによって社是とか社風とか芸風とかにしたがって、思うよう好きなように筆を執ればよい。ただし、いわばその筆先や筆の振れや練りぐあいは問われる。「いい話」とは、なにか？

わたしの手許にあつて愛用している、なかなか使い勝手のよい電子辞書（CASIO EX-word DATAPLUS9 ED-K18000）では、『精選版日本国語大辞典』『広辞苑』『明鏡国語辞

21) 「社会社説担当」も前掲「共感ジャーナリズム」には「私たちひとりひとりが隔離してきた側の人間であり、その歴史を刻む日本にいま生きている」と記す。

典』のどれにも、その語は載っていなかった。だが、『新和英大辞典』にはそれがあり、例文として、「娘にいい話があるんだが、本人は当分結婚する気はないらしい」「心あたたまるいい話だね」などが示され、後者の英訳は「That's a really heartwarming story, isn't it.」とのこと。Google で検索すると（2020年4月18日）、見出しには、「読むと心が温まる、優しい記事」「優しい世界にほっこり」「日常の中のちょっといい話に癒される」「疲れた時に、ちょっと感動する「いい話」といった言葉がならぶ。こうしたところに、世間に共通する「いい話」の感触があらわれているのだろう。「ちょっと」が重要なのだ——元気をあげる・もらえる、感動をもらえる、癒される、ほっこりする、こころあたたまると「いい話」、が、ひとのツボにはまる。「ハンセン病のことはこつこつと。犯罪被害者・加害者も。そして戦争の語り継ぎ。人を勇気づける記事、「いい話」をたくさん書いてゆきたいです」とは、そういうことか。それと、「全体像」だとか、「構造的、歴史的な事実を検証する」だとか、わたしにはどうにもつながるとはおもえず、それを為し得る技能は、わたしには超絶離れ業に見える。ハンセン病も戦争も犯罪も、「いい話」にまとめられたり括られたりするような出来事なのか。そうやって噛み砕かれて甘い優しさがまぶされた「いい話」は、いつときの涼風のように人びとのこころを癒して撫でるだろうが、それでお終い。たいへんだったんだ、可哀そうだね、でもみんな力強く生き抜いてよかったね、元気をもらった！で終わる。

* **

ひとまずの脱稿となった2020年4月22日時点のようすを書きとめよう。国立ハンセン病資料館ホームページのトップは、相変わらず「当面の間、臨時休館を延長いたします」と告げ、「開館カレンダー」は3月29日から5月2日まですべて「休館日」色。国立国会図書館は、そのホームページで4月10日付の通知か、「これまで開館してきた関西館においても」、そして東京本館と国際子ども図書館はそれ以前からの継続として、5月20日までの「来館サービス休止のお知らせ」をかかげた。

どちらもまたいずれ、かならず、開く。

『朝日新聞』が2020年3月31日朝刊で、「図書館のコロナ対策投稿を募集します」とかかげた——「新型コロナウイルス対策で図書館が業務を縮小したことに疑問の声が寄せ

られました。最寄りの図書館は貸し出しや閲覧でどんな対応や工夫をしていますか」。

応募の投書が、4月15日の同紙朝刊紙面に載った（「どう思いますか／図書館のウイルス対策」）。発端となった投書ということなのだろう、その「3月5日＝要旨」が冒頭におかれた。紙面をさかのぼってその全文をみる（「まちの図書館が業務縮小 疑問」無職、東京都、87歳）——図書館へゆくと「書架と席はロープが張られていて中に入ることができず、借りたい本は予約をしてカウンターでうけとることとなった。その理由を、「区内一律の新型コロナウイルスの感染予防対策で、不特定多数の人に館内で長時間滞在してほしくないようだ」と推察する。「学校が急に休校になって、行き場や学ぶ場を失った子どもたちにとっても図書館は重要な場」だととらえ、「地域の図書館の書架にさえ入れないという対応は、やり過ぎではないか」と考え、「コロナウイルスを恐れるあまり、まるで戒厳令が出たかのように、何でも自粛してしまうような萎縮社会にならなければいいが」とのうったえが記された。

「朝日新聞 DIGITAL」の「新聞記事検索」を使って、「キーワード検索」で「図書館」の語、「検索面」を「オピニオン・声面」として検索すると、2020年3月は4件、うち「声面」は3件のヒット（さきの5日付と31日付）。3月5日朝刊「声」面にはもうひとつ、「ぜひ利用したい 服の図書館」（大学生、大阪府、21歳）があった。これは厳密に言えば「図書館」ではなく、アムステルダムにある服のレンタル店で、それが「ファッション図書館「LENA」」。

4月15日付「声」欄のいわば「図書館」特集は、5件の投書を取りあげた——①「感染リスク避ける苦渋の措置」図書館司書、東京都、58歳）、②「「福袋」の貸し出しに感心する」（派遣社員、大阪府、39歳）、③「高齢者の居場所として不可欠」（無職、愛知県、79歳）、④「休館への関心の薄さに落胆」（日本語教師、東京都、62歳）、⑤「借りやすい図書館へ変革を」（地方公務員、神奈川県、52歳）（以下、数字であらわす）。図書館に勤務するものと、図書館を利用するものにと投書者を二分していながらも、その比率はひどく不均衡で、それが投書全体での差を反映しているのかは不明。この投書募集のきっかけが、COVID-19にかかわる図書館業務の縮小と、そのなかでの対応やくふうだったのだから、図書館をめぐる、勤務と利用の双方から応募があって当然だが、そうであればなおのこと、前者の少なさがわたしにはひっかかる（あえて掲載をしぼったということではな

いだろう)。図書館を運営するものからもっと声をあげてほしかった。

では①はどう「疑問にお答えした」か。同人が「勤務する図書館もウイルス対策のため、臨時休館」中とのこと。なぜか。「新型コロナウイルスの感染では、「高齢者の重篤化」と「若者による感染拡大」が問題になってい」て、図書館には「この両者が同じ空間に長く」るので、「感染拡大防止という観点からは最悪」だから。学校休校のため小中高校生の多数来館が予想され、「すでに「誰が誰にうつしているか分からない」のが現状」であり、しかも「図書館は密閉空間」でもある、という。だから、「感染リスクが高いことを考慮した苦渋の決断であることをご理解ください」との要望を示したうえで、末尾には「業務を縮小したい司書はおりません」との、いうならば苦衷をみせたのだろう。いま多くのひと（為政者や経営者や事業者に多いか）の口にのぼる、「苦渋の決断」が決め手である。

③は「図書館は高齢者の居場所としてなくてはならない存在」なので、「ぜひ、条件付きで開館するよう、お願いしたい」とうったえる。その「条件」とは、これまたいまや人口に膾炙した3つの密、「密閉、密集、密接」を避ける工夫をしつつ、利用できないか」と示したうえでその具体策も提示する。この投書募集は「対応や工夫」をもとめていたのだから、さきの①が前者を、この③が後者をということで募集された投書としてつながりはするが、しかし、現に図書館を利用するものからすれば、なぜこれらの「工夫」が実施されずに、勤務＝運営するものは「苦渋の決断」の言辞をもって臨時休館という「対応」を選んだのか、となる。この点で両者は噛み合わないのだ。「工夫」といってもなにをやるか、投書者があげたそれはとても単純で、換気、マスク、検温、滞在時間制限、消毒である。やがてひととの接触8割減が目指されれば、勤務する職員の数も減り、通常の図書館業務にくわえてさきのあれこれもするとなると、業務過剰となることもわかる。ただ、図書館は、①にあるとおり「乳幼児」への「読み聞かせのイベントでの利用」（満1歳未満の乳児も？）もあるとはいえ、基本はおしゃべりをしない空間である（といっても現状がまるで違うこともわかる）。3密さえ避ければよいのだから、それなりの「工夫」がありそうなものの、ほぼ一斉に一律に臨時休館が実施されることには、やはり疑問を感じるところだ。「業務を縮小したい司書はおりません」というのならば、その「司書」が実施しようとした「工夫」、協議をして試みもしたけれども実現しなかった「工夫」、開館の可能性へとつながる「工夫」などをもっとあげるとよかった。

しかし「臨時」休館がそれこそ全国にあまねくゆきわたろうとする事態の背景、休館を「臨時」ではあれ支えている要因には、④が指摘するとおり、社会における「図書館休館への反応の薄さ」があるわけだ。「世間ではコンサートやスポーツイベントが開催されると、その是非をめぐる、ネットなどで侃々諤々の議論が起きているが、図書館休館に対しては、異論を唱えたり、窮状を訴えたりする意見はあまり目にしない」。そうした「世間」の「対応」をみると、ということなのだろう、「国民の学問・学術に対する冷淡な態度がうかがわれるようで、悲しい気持ちになる」と投書は結ばれた²²⁾。

大学でも、この2020年春は、入学式の中止や会場への入場制限がとられた。ある国立大学法人では、中止となった入学式(4月6日開催予定のそれを3月25日付で中止)で学長がのべるはずだったであろう、「新生へメッセージ」(4月6付)を大学のホームページをとおして発信した。

その大学では、3月31日付で翌日から始まる次年度の講義について、「オンライン授業を本格的に導入する予定」だと告知していた。同大の学長が「皆さんの入学・進学にあたって、伝えたいことが三つあります」とさきの「メッセージ」で示したその第3が、「新型コロナウイルス感染症の影響によるオンライン授業の展開から開かれる新しい地平が皆さんの前にあるということ」だった。どのような「新しい地平」があるとみせたのか――

これまでの面接授業では、教室という一つの閉じられた空間の中で講義が行われるため、教室という空間の広さによって講義が制限される側面がありました。教員もそれに甘んじてきたきらいがあります。しかし、インターネットでの教育は、ある定まった広さの空間という制限を超えて、ネットに載せることができる限り、あらゆる大きさ、形状、性質のものでも、用い、提示し、表現することができます。／つまり、どのような講義も、また学習も可能になったということです。つまりオンライン講義は無量大の教育の可能性を開いたこととなります。

これもまた「いい話」なのだろう。ゆく先が不透明な暗鬱で閉塞した現状において、明るく広がる、すぐそこにある展望が語られた。埼玉県ホームページに、「消費生活支援センター」の業務にかかわって、「大丈夫? うまい「儲け話」にご用心!」の見出しがあった

²²⁾『朝日新聞』は2020年4月26日朝刊に「人文知を軽んじた失政／歴史に学ばず、現場を知らず、統率力なき言葉」と題した藤原辰史の論考を載せた。

(2020年4月24日閲覧)。うまい話に用心が必要であれば、いい話もおなじだ。さきの学長メッセージに要注意²³⁾——「ネットに載せることができる限り」という限定がつきながらも、「ある定まった広さの空間という制限を超えて」「あらゆる大きさ、形状、性質のものでも、用い、提示し、表現することができます」と「インターネット教育」を絶賛する。そして、段落をかえて、「つまり」——つまりは「結局。つまるどころ。要するに」「言いかえると。すなわち」(『広辞苑』)——「どのような講義も、また学習も可能になったということです」と断言してしまう。さらにもうひとつ「つまり」と語を重ねて、「オンライン講義は無量大の教育の可能性を開いたこととなります」と、そのすぐまえにあった「限り」という制約をこえて「どのような講義も、また学習も」、「無量大の教育」も「可能」になった地平へと飛翔させられてしまうのである。いや、あくまで「可能性」を示したにすぎない、との附言があったらどうしよう。さきの埼玉県の「ご用心!」は、「消費者へのアドバイス」として、「必ず儲かる」と勧誘されても、出資者が実際に利益を得られる保証はありません」と説いていた。それに比べれば、「可能性」なのだから、良心があるといえる。

けれども、ネットに載せることができる限り、どのような講義も学習も可能になった、オンライン講義は無量大の教育の可能性を開いた、といわれると、それを担う現場の教員は戸惑いを覚えないのだろうか。しかも、この「可能性」は、「これまでの面接授業では、教室という一つの閉じられた空間の中で講義が行われるため、教室という空間の広さによって講義が制限される側面がありました。教員もそれに甘んじてきたきらいがあります」との、教員への指弾との組みあわせで展望された Horizont なのだ。

【甘んずる】「与えられたものをしかたないと思って受ける」(『広辞苑』)。例文として、「薄給に一・ずる」「一・じて犠牲となる」がある。教室での対面での講義は、「薄給」に喩えられる、止むなくせざるを得なかった事態なのか。だったら学長として給料をあげれ

²³⁾ 同メッセージでは「新型コロナウイルス感染症の影響によるオンライン授業の展開から開かれる新しい地平」を示すなかで「コロナ戦争とでもいうべき新型コロナウイルス感染症との長期的な闘い」「コロナ戦争という非常事態」との比喩が用いられている。たとえば『文芸春秋』2020年5月号が「総力特集 コロナ戦争 日本の英知で「疫病」に打ち克つ」と銘打ったとおり一般にもみられるこうした喩えにたいして、「社説 対コロナ「戦争」の例えは適切か」との疑問がむけられている(『朝日新聞』2020年5月6日朝刊)。これについてはべつに論じる予定。

ばよい。わたしたち大学教員は、教室の狭さにみあうほどの時間と空間でしか、学生に教授してこなかったのか。学生はこれまでずっと、制限や不備のある講義をしかたないとおもってうけてきたということか。

教室の狭さを補うために、どの大学にも附属図書館がある。オンライン講義はほとんどの大学で現在、その図書館を閉めたうえで実施されている²⁴⁾。さきの「新入生へのメッセージ」の送り主が学長をつとめる大学でもそうだ——わたしは、そこに、職を得ている（ただし着任はわたしが、さき）。

投書「図書館」にもどろう。

みずからを「活字中毒」と診断したうえで⑤は、「閲覧制限」を解消するために「もっと工夫を」と望む。「公立図書館の利用のしやすさは、自治体の教育への熱意のバロメーター」なのだから、「現在6冊までの利用制限を増やすなど、まずやれることから、借りやすい図書館への変革を考えてほしい」ともとめ、その具体策として、館内の仕切区分や「仮想図書館」などをあげている。

利用者はあれこれ「工夫」を示して図書館が使えることを望み、職員はあれもこれもと「対応」せざるを得ない事情をあげて図書館を閉ざす理由を説く。ただ、②では「書架への立ち入りが禁止とな」ったなかで、「「絵本 犬、ネコ3冊」「料理2冊」などと書かれたカードをカウンターに持参すると用意された本を借りられる仕組み」＝「福袋はじめました」という図書館の「工夫」を利用者が「感心し」紹介していた。それも「緊急事態宣言を受けて14日から完全休館になり残念です」と惜しまれ嘆かれてしまう。

そう、図書館職員が「苦渋の決断」にいたる過程で練りあげたり試みたりした「工夫」をもっとたくさん投書し、それがこの特集欄でとりあげられていたら、それは言い訳とはみなされずに、この特集からうける図書館が止む無くおこなった「対応」への印象もずいぶん異なるものとなっただろう（くりかえせば読者に投書の総体も概要もわからないのだが）。

図書館は「未知の本と出会えるかもしれない」空間である（②）。さきの「仮想図書館」

²⁴⁾ さきに本稿の「余瀝」と題した節でみた紀要の発行元である大学の図書館では、「閉館中の貸出資料郵送対応について」を2020年4月23日付で同館ホームページに掲示した（「臨時閉館」は「4月21日（火）以降も当面の間」とのこと。同月25日閲覧）。「郵送料」の「往きは図書館負担、返送は利用者負担」とのこと。大学図書館としての見識を

(⑤) の提案も実際に書架を眺める体験とおなじような「仮想」のそれをもとめていて、図書カードでの検索でもなく、OPAC (Online Public Access Catalog) による端末機での検索でもない、書架で背表紙を眺めて本を手にとって選ぶという「本に出会えるチャンス」を望んでいたのである。近年の OPAC もたんなるキーワード検索による結果表示だけでなく、関連する図書、該当書のいわば近隣の図書も表示できるようになっている。ただそれとは違う、書架の背表紙をみながら本を手にする利用者のよろこびや楽しみの種もまた、図書館には備わっているはずなのだ。「ネットに載せることができる限り」得られる膨大な利便や快樂もあるとおもう。ただしそれでひとの興味関心や望みのすべてを埋め尽くせるわけではない。図書館も「ネット」もまたあたりまえに有限の空間であり、しかし、ひとがそこに立ち、そこからみて、そして本を手にとることで、ひとの望みにみあうころのうちの無尽蔵ともいえる庫となり得るところに、図書館の魅惑があるのだと、わたしは感じる。それを伝えられなければ、公立図書館であれ大学附属図書館であれ、それらが世間から消えてゆくだろう。そうなったら、それは利用者に責があるのではなく、その運用者こそがその責を負うべきである。図書館を必要としない社会はいずれ、大学をも不要とするはずだ²⁵⁾。

確か 2020 年 3 月 18 日に書き始めた本稿は、そのときは、「ハンセン病をめぐる療養所を訪う、知る、報せる—2020 年 2 月、3 月雑感」の論題で発表する予定だった。副題にあるとおり、「雑感」を記録するところに眼目があり、削除はしたもののその語が指し示すところは継いで、「種々さまざま、まとまりのない感想」(『広辞苑』)を綴っている。

始まりは、青木恵哉と井伊文子のつながりをたどることにあり、そこから第二次世界大戦後の沖縄の世を生きる青木のむきあい方を知り、それは晩年の彼の一端をつかむこととなり、そうした作業とならんで入手した、彼の生地阿南での彼を展示するようすを批評し

している。

²⁵⁾ 2019 年 5 月 1 日時点での大学進学率は 53.1%で「過去最高」とのこと(文部科学省 2019 年 8 月 8 日報道発表)。これまでにない高進学率はまた、依然として、あるいはいま現在、半数弱の人びとが大学進学を選択していないことをあらわしている。半数弱の人びとにとって大学は必ず要する必要がないわけだ。もちろん半数弱のうちに進学したくてもできない人びとがいることも忘れてはならない。

た。出身地とはいえ阿南市内でも徳島県内でもほとんど知られていないかつてのハンセン病発症者をいま、展示をとおして報せようとする所為を批評するために、現在のハンセン病療養所を撮った写真展をめぐる報道を参照したり、みずからは体験していない被爆を、高校生たちが当事者との交流をつうじて描くようすをとらえたドキュメンタリを参照したりするなかで紙幅が増えていったため、それぞれの対象に即して原稿を分割発表することとした。それらに一貫する論点は、自己省察である。

文句も批評も^{けな}貶しも提言もいい掛かりもみな一緒くたに、批判はやめよう、と^{いき}諷めたり^{たしな}奢めたり雰囲気^{たしな}が充満しているいま、現時になにかを述べる、現状をどうにかあらわすことをめぐるひとつの指針が示された——「風刺の力が境界線をあいまいにし、新たな「連なり」の礎となる」、それを「文化」と呼ぼうとの発信である²⁶⁾。そこでは「日本の文化的伝統である。連歌、連詞、連句」を顧みて、その技芸を現在の YouTube や SNS へと連結させ、「創造の世界に殉じる喜びと葛藤の振幅によって培われる、他者の苦しみを繊細に察し、表現する力への畏れを」得ようとの願いが発出されたのである。記述のうえでこの願いは、ほかのだれでもない「政治家」にむけられている。それをしかと見据えたうえで、この言を、わたしたちのものとする努めをつくすことで、わたしたちは、「ルイ 16 世」にもなぞらえられた宰相を凌駕しよう。

本稿のわたしの言葉が、舌剣に墮しているかもしれないとの自覚はある。ただ、わたしはいずれも著名人や名士、専門職や本職を相手にしている。いずれも、それなりに情報を収集し、それを手持ちの知識へと練りあげ、獲得した技能を駆使して、表現を為し得るものたちである。そのときどうにも蓄積に乏しいわたしたちは、だれかの、どこかでの体験を参照したり借用したりせざるを得ない。それはときに横領や略奪ともなる。わたしたちは他者の所為を凝視したり瞥見したり窃視したりすることをとおして、賢くなろうとするのだろう。そうして得られた賢俊さをもって、表現する能力を発揮できるようになったとき、そこに潜められた「力への畏れ」をきちんと身につけたいとおもう——自己省察とその連理²⁷⁾。

²⁶⁾「風刺で「連なる」これが文化—「うちで踊ろう」考」(『朝日新聞』2020年4月26日朝刊。署名は「編集委員・吉田純子」)。

²⁷⁾「1本の木の幹や枝が他の木の幹や枝とつらなって木理[木目]が通じていること」(『広辞苑』)をいう「連理」の語を、自己省察の条理が連なる、の謂で用いた。

COVID-19 とのかかわりで、あれやこれやの「自粛」から外れた行為が「自己責任」へと集約されかねず、それへの危惧があらわされているいま²⁸⁾、その語が用いられるときおうおうにして、それは他者にむけて、しかも、「責任」をみずから自己に問えと詰め寄る用法となり、それは問いつめる側のみずからの「努力と才覚」を根拠とする「自助努力の全能感」と組みあわさった「他者への攻撃性に一層つながりやすくなっている」との警戒がかかげられている。「レスポンシビリティ（責任）」とは、「レスポンス（応答、反応）+アビリティ（能力）」で、応答できる力を持っていることが本質なのだ、と。つまり、しかるべき役割や責務を果たそうとするのが責任」だと説かれる²⁹⁾。

対応する力能、これが「レスポンシビリティ（責任）」だ、というとき、その語がとりわけ「自己」と組みあわさって「自己責任」といわれる現状での指摘された論点は、「他者への攻撃性」があるということ。くわえてもうひとつ、自己にむけられる指摘、要請、指示、命令を、わたしはわたしでみずからしている・できるのだから、余計なおせっかいはやめて、と撥ね退けてしまうことにある、とわたしは考える。

後者はある事態をめぐる自己完結をあらわしている。なにかが生じたときに、自己と他者との距離はともかくも、自分以外のだれからであれわたしにたいするどのようなもの言いも、拒絶する——わたしはわたしで対処しているし、なにかあっても、それをわたしはうけいれるし、わたしは端からそうしたなにかをすら想定していない、だからだいたいようぶ、おせっかいはやめて、というわけだ。しかし、なにかをいおうとする他者は、そのひとかぎりの対処でことが収まりはしないとの危機や不安を感じとっているからこそ、あえて、あるいは好んで、または止む無く、他者にものをいうのである。そのとき、ものをいうわたしは、ことが危険であることを知る、わかる、察知することができる、それがわからないひとに伝え、教えているのだから、よくよく考えてわかれ、と命じてしまうばあいがある。当人がつかむ自己完結は空虚であり、そうわかっているわたしだから指摘、要請、指示、命令をし得る、だから、わからないのであれば、わかるようにしむける、わからな

28) たとえば、「社説 コロナと困窮 安全網を張り直すとき」（『朝日新聞』2020年4月27日朝刊）。

29) 清田隆之「ゆがんだ自己責任論 映す」（「耕論 新型コロナ 悪いのは若者なのか」『朝日新聞』2020年4月21日朝刊）。なおこうした「責任」をめぐる議論はすでに、戦争のそれについて提起されていた（たとえば、高橋哲哉『戦後責任論』講談社学術文庫、2005年、元版1999年、など）。

ければ、では排除してよし、と「他者の攻撃性」へといたるのである。

それは、あることがらに対応する力能をめぐる相互不信から発している³⁰⁾。自己完結を根拠に他者を拒絶するものは、みずからの「責任」を信じて疑わないわけだし、他者に口出しするものはその「レスポンスビリティ」を疑って信じないのだから。この相互不信の打開は、ごく単純なあたりまえの方途をとることとなる——自己と他者がどれだけ交われるか、だ。なにかしらに対応する、わたしたちの力能を組みたて得るか、である。

わたしが問う自己省察も、それを果たしているかと、他者にそれへの応答を迫っているきらいがある、と気づいた。ただ、「省察」は「reflection」であり、それは「serious thought or consideration」や「an idea about something, especially one that is written down or expressed」であれば (Oxford Dictionary of English)、なんということのないひとの思案や思索であり、「self-reflection」ともいえば、それは「内省」であり、自己の思惟と行動を省みることである。それを不要とは、だれもいえないはずで、ただし、それをもって他者への批評のいわば試験試薬とするならば、繊細さと^{かしこ}畏みと怖れとをあわせもてるようになる³⁰⁾とよい。内省であれ省察であれ、わたしたちのそれを組み得るのか、なにかしらの出来事やことがらや事態にたいして、わたしたちがともに興味関心を寄せ、思案や思索をめぐる³⁰⁾るとき、その根元である出来事やことがらや事態にむかうわたしたちの思惟が屈曲をして、わたしたちにかえってくる、そうした情動をともになし得るか、ということなのだろう。

2020年4月27日提出、同日発行日(5月12日)決定、同年5月9日までに追記

³⁰⁾ 「英語で「セルフ・レスポンスビリティ」という言い方は普通しません。「レスポンスビリティ」だけで十分だからです。責任というのは、もちろん個人に帰属するけれども、それは相手に対するレスポンスができるということで、必ずそこに権限も含めた人間関係の信頼というものがあるから成立している。／レスポンスビリティは応答可能性であり、まさにレスポンスなんです。責任を引き受けた人たちはそれによって権限が得られるわけですが、その権限に対する自覚を持って対応していく。そのことへの信頼があるから、委ねられるし、任せられる」(荻谷剛彦ほか『大学はもう死んでいる?—トップユニバーシティからの問題提起』集英社、2020年。下線は引用者による)。下線部が、2020年4月18日「折々のことば」(『朝日新聞』朝刊)で引用、紹介された。